ディルタイ著「哲學の本質」の邦譯に就いての質疑

戸田三郎

勝部氏以前にディルタイを語つた人が吾國になかつたのではないが、特にディルタイが豐かなみのりを約束する一人の學者として注目され一つの勢力としてわが思想を率ゐるに到つたのは、やはり勝部氏の功績である。私も此の先覺者に從ふ一人であつて、ディルタイの「哲學の本質」を讀むに當つても氏の邦譯に多くを期待した。圖らずもそれには屢々甚しい誤譯がありはしないかと疑はねばならなかつた。吾國に於けるディルタイ及び勝部氏の意味が大きいだけに、この疑ひは默さるべきものではないであらう。尤も私は最初この質疑を私的に行つてもよいと思つてゐた、――が今はそれに對する勝部氏の釋明が公にされる必要があると考へるやうになつた。何故ならこの書の誤譯の疑ひをもつてゐる人々は私の他にもあるのを知つたから。氏の釋明が公にされて多くの人々が利益を得るためには、私の質疑も公になる方がよいゝであらう。畢竟私は氏の釋明を引き出すための導火線となつて燃え、消え去ればそれでいゝ。そして若し同時にこれによつてディルタイに關する眞面目なる研究を喚び起す機會を作り得たならば望外の幸福である。

（a）邦譯九頁。「國家、時代、歷史的發展の階段の如きが形成せらるゝに當つては、隨意といふことがこれを支配するのではなくて、寧ろ我々は再體驗の必然性に據り乍ら、斯る發展形式内に於て人間及び民族の本質的なるものを明瞭ならしめんとするものである。それ故に若し歷史的世界に於ける概念構成を以つて單に統一體を其儘描寫し表現するための補助手段なりと考へるのは、大なる誤である。事象や統一體の凡ての描寫や記述を超えて思惟は本質と必然とを認識せんとし、個人的生活及び社會的生活の構造關聯を理解せんとするものである。」

之に對する原文。Nationen, Zeitalter, geschichtliche Entwicklungsreihen—— *in diesen Formungen* schaltet nicht freie Willkür, sondern, gebunden an die Notwendigkeit des Nacherlebens, suchen wir *in ihnen* das Wesenhafte der Menschen und der Völker zur Klarheit zu erheben. Man verkennt sonach vollständig *das Interesse, das der denkende Mensch der geschichtlichen Welt entgegenbringt*, wenn man die Begriffsbildung in ihrem Bereich nur als ein Hilfsmittel ansieht, *das Singulare*, wie es ist, abzubilden und darzustellen; über alle Abbildung und Stilisierung des Tatsächlichen und *Singularen* hinaus will das Denken zur Erkenntnis des Wesenhaften und Notwendigen gelangen: es will den Strukturzusammenhang des individuellen und des gesellschaftlichen Lebens verstehen (Dilthey, Gesammelte Schriften, V. Band, S. 341—342.)

in diesen Formungen は「國家、時代、歷史の發展の系列」といふ歷史的實在を表はす概念構成に於ては」といふ意味であると思はれる。國家時代云

々のもの其のものゝ形成を云つてゐるのではない。それは原文の同じ頁の十三行目に於て Nicht willkürlich indes sind die *Formungen*, die Zusammenfassungen des Singularen. と云ひ、此の引證の箇所にも云ふ wenn man *Begriffsbildung* in ihrem Bereich と呼應する。ディルタイは此の「Formungen を「個人及び社會の生命の體驗されたる構造的統一の表現」であると云つてゐる（同十五行目）。明らかに「之らの概念構成に於ては」と譯さねばならないやうである。そこで in ihnen を勝部氏のやうに「發展形式内に於て」と譯する過失は避けられる。ihnen が Formungen を表はすことは明らかである。次に Man verkennt sonach に續く vollständig das Interesse, das der denkende Mensch der geschichtlichen Welt entgegenbringt, の一句を勝部氏は全然譯してゐられない。之は譯さないでいゝものではない。次に das Singulare は「特殊」と譯して戴きたい。勝部氏のやうに「統一體」と譯したのでは構造的統一と紛らひ、原文が意味するものゝ正反對を表はすことになる恐れがある。特殊や構造的統一或ひは聯關と見る所が注意すべきディルタイの主張であるが、しかし特殊がそれがあるがまゝの (wie es ist) 狀態で記述されたのでは、構造的統一としては現はれて來ない。故に das Singulare はそれと混同されないために「統一體」と譯されてはならない。第一文は「ものである」と終つてゐるが之は餘計である。譯本全體に亙つてこの餘計な脚が横行してゐる、この脚はどうぞ拔いて欲しい「ものである」。

（b）　十八―十九頁。「さてこの哲學とか、又宗教、藝術、科學とかの概念の範圍に於ては、一般に二つの出發點がある。即ち個々の事象間の親屬性といふことゝ、それからかゝる事象が總括的に結びつけられて居る關聯といふことがこれであ

る。この故に一方ではこの哲學なる一般的主體概念の下に、其方法の分化に應じて樣々の特性を有する哲學が續出すると共に、又他方哲學なるものは早くからそれ自體の活動といふことが意識せられるといふ長所を持つて居るのである。即ち哲學的態度に依りて求められる概念決定の企圖は、實に無數に存して居る。實際この哲學といふ語は、個々の哲學者が一定の文化狀態に依り規定せられ又自己獨特の哲學體系に依り導かれて、哲學とは斯くの如きものであると見たものを表現するものである。此故に哲學とは何ぞやといふことについてのこれ等の定義は、結局哲學の歷史的形式は如何なる特性を有するかといふことを略述するものである。即ちこれ等の定義は實に、哲學が文化の關聯中に於て樣々の地位を占め來れることを語る內面的辯證法を洞察せしめるものである。この故に哲學が取り來れる樣々の地位は、それぞれこの哲學の概念決定に對して多大の效果を有し得るものである。」

Nun sind in der Sphäre solcher Begriffe wie Philosophie, Religion, Kunst, Wissenschaft überall zwei Ausgangspunkte gegeben: die Verwandtschaft der einzelnen Tatbestände und der Zusammenhang, zu welchem dieselben verbunden sind. *Und wie dann die besondere Natur eines jeden unter diesen allgemeinen Subjektbegriffen für die Differenzierung der Methode fruchtbar wird, bietet sich in unserem Fall weiter der eigne Vorteil, dass die Philosophie sich früh selber zum Bewusstsein ihres Tuns erhoben hat.* So ist eine grosse Mannigfaltigkeit von Versuchen einer Begriffsbestimmung, *wie unser Verfahren sie anstrebt,* vorhanden; *sie sind* der Ausdruck davon, was die einzelnen

Philosophen, durch eine gegebene Kulturlage bestimmt und von ihrem eignen System geleitet, als Philosophie angesehen haben; daher sind diese Definitionen *Abbreviaturen* dessen, was für eine historische Form der Philosophie charakteristisch ist: sie eröffnen den Einblick in die innere Dialektik, in welcher die Philosophie die *Möglichkeiten ihrer Stellung im Zusammenhang der Kultur durchlaufen hat.* Jede dieser *Möglichkeiten muss* für die Begriffsbestimmung der Philosophie fruchtbar gemacht werden können. (S. 344.)

勝部氏は diesen allgemeinen Subjektbegriffen を「哲學なる一般的主體概念」と譯してゐられる、それは次の für die Differenzierung der Methode fruchtbar wird, bietet sich ……の全文の翻譯に當つて勝部氏に復讐した、即ち此の一文は二つの意味の聯關から成つてゐて、前段は廣く哲學、宗教藝術、科學なる普遍的主體概念の下に於ける各々の事實的存在が、それぞれ特殊な性質をもつてをり、そしてこの特殊性に應じて方法がまた特殊なものとなり、こゝに方法の分化が促されることを述べてゐる。後段は、哲學が古くから自身の仕事を意識したことからして、哲學に就いての定義が早くから試みられ、從つて吾々の場合即ち哲學の概念規定の場合には、他の宗教、科學の概念規定の場合には缺けてゐるところの固有の利（der eigne Vorteil）が更に（weiter）供せられるといふのである。勝部氏の譯は、diesen allgemeinen Subjektbegriffen の譯に際して原文の進路から外れた角度を保つて進行してゐるのである。次に wie unser Verfahren sie anstrebt は、ディルタイ其の人の、哲學の概念規定の仕事——即ち此の「哲學の本質」といふ論文の課題を意味してゐるので、勝部氏の如

く「卽ち哲學的態度に依りて求められる」と讀んではならないと思はれる。次の sie sind は又決して「實際この哲學といふ語は」でなく、「それらの試みは」である——Versuchen の代名詞である。私が此の次に指摘する箇所は、原文の意味から云つても、譯文の不完全さから云つても重大であるやうである。sie eröffnen den Einblick 以下の文を勝部氏の樣に譯するか、或ひは私の樣に(後出)譯するかは、單に意譯をとるか直譯をとるかの相違ではない。die Möglichkeiten は必ず「可能性」と譯さねばならない、durchlaufen は必ず「歷進する」と譯さねばならないのである、——何故なら哲學が文化の聯關に於ける位置の諸々の可能性を歷進するところに、哲學の發展を支配する或る一つの法則性が、卽ち內面的辯證法が現はれるのであるから。氏のやうに「樣々の地位を占め來れることを語る」としたのでは、その歷進に或る一つの法則性が內在する事實が表はされず、內面的辯證法云々の語によつて初めてその法則性が氣付かれるに過ぎない。換言すれば「諸々の可能性の歷進」とは法則的なる概念であるのに氏の譯にはそれが出てゐない。次に Jede dieser Möglichkeiten muss..... fruchtbar gemacht werden können. は字の通りに「諸々の可能性の各々は多くの效果を擧げ得るやうになされることが出來ねばならない」と譯すべきである。ディルタイはまさしく、歷史に表はれた諸々の可能性を統一し得るが如き哲學の概念規定を求めることを彼の課題としてゐる。

私はこゝにこの全文を譯することによつて、勝部氏との相違を明らかにし、敎へを乞ふこととしたい。「さて、哲學、宗敎、藝術、科學の如き諸概念の領域にあつては昔く二つの出發點が與へられてゐる——卽ち個々の事實の間の親屬性と、之等の事實がそれに結合されてゐるところの聯關と、

そして次に之等の普遍的なる主體概念の下に屬する各々の事實の夫々特殊な性質は方法の分化を生むようになるのであるが、吾々の場合には更に、哲學は夙くより自分みづからそれの仕事の自覺に達してゐたといふ固有の利が供せられてゐる。そこで吾々の仕事が目的として努力してゐるやうな概念規定についての實に多樣な試みが存してゐる——それらの試みは個々の哲學者が、與へられたる文化の狀態によつて規定されまた彼らの自身の體系に導かれて、哲學を見做したところのものを表はすものである。それ故に之らの定義は、哲學の或る一つの歷史的形態にとつて特質的であるものの縮圖である、——それらは、內面的辯證法——それに由つて哲學が文化の聯關に於てそれの占める位置の諸々の可能性を歷進して來たところの內面的辯證法を見取る道を開く。之らの可能性の各々は、　學の概念規定にとつて收穫を齎すやうになされることが出來ねばならない。」

（c）　二十四頁。「次に哲學の今一つの形式的特徵は、普遍妥當的知識を要求することにある。而してこれがためには、哲學の建設に對しては其最終の基礎まで溯つて明らかにするといふことを必要とするのである。」

Der andere formale Zug der Philosophie liegt in der Forderung allgemeingültigen Wissens. *Hiermit ist verbunden das Streben*, in der Begründung zurückzugehen, bis der letzte Punkt für die *Fundierung* der Philosophie erreicht ist. (S. 346.)

邦譯は「これがためには」で第二文を起してゐるが原文はこれに似た言葉さへ云つてゐない。又「といふことを必要とするのである」と終つてゐるが之も亦原文の知らぬ所である。邦譯の「哲學の建設」は Fundierung der Philosophie の譯であらうと

思はれるが、それは慣用に從つた譯出でない。私はこの第二文を次の樣に譯せば良いかと思ふ「之に、(即ち普遍妥當的知識を要求する哲學の形式的特徴に、)哲學に基礎を與へるための最後の點が到達されるまで、基礎付けに於て還つてゆくといふ努力が結びつけられてゐる(或ひは伴つてゐる)。」

(d) Indem sich in diesem (dem Positivismus) durch die Überordnung der Naturerkenntnis über die geistigen Tatsachen eine Weltanschauung einmischt, wird er zu einer einzelnen Doktrin innerhalb dieser neuen Stellung des philosophischen Geistes. Wir finden dieselbe Stellung *auch ohne diesen Zusatz* weit *verbreitet*, und ……(S. 350.)之に對する邦譯は次の如くなつてゐる。

七三頁。「何となれば實證主義は、自然認識をば精神的事實の上位に置くものである。かくの如くにしてこの實證主義の領域内に、一の世界觀が混入される。從つて實證主義はこの哲學的精神の新地位に於ては、單に或る一の教說となるのである。我々はこの地位がいかにも附說なしに、擴大せられて居ることは首肯する。」

私の見る所では原文に云ふ dieser Zusatz とは、此の直前に述べられてあること——即ち實證主義に於て一つの世界觀が混入され、實證主義が非形而上學的立場に於ける個々の哲學的教義の一つになるといふこと——を意味する。即ち「一つの世界觀が混入し、一つの教義になるといふことなくして」が ohne diesen Zusatz の意味であつて、之を勝部氏がなされたやうに「いかにも附說なしに」と譯することに對する反對は、多くの人の贊同を得るであらうと考へる。そこで私は更に之を「此の混入(或ひは附加)なくして」と譯することを提案する。次に Wir finden……weit verbreitet の邦譯

「我々は……擴大せられて居ることは首肯する」も誤つてゐる。そこで最後の一文は全然誤解されたことになる。私は之を「吾々は此の立場がまた此の混入(附加)なくして廣くひろまつてゐるのを見出す。」と譯したい。ディルタイは此の混入なき立場を eine dem Positivismus verwandte philosophische Stellung (S. 361) とよんでゐる。

(e) Schluss auf das Wesen der Philosophie の章は內容の重要さに拘はらず多くの甚しい誤譯があるように思ふ。

八一頁「かくの如き哲學の概念決定が企てられた見地は、勿論體系的哲學者の見地である。彼等は自己の體系の關聯よりして、何が自分にとりて價値あるものであり、又解決し得る問題であるかといふことを、一の定義に依つて表明しやうとするのである。此點に於いて彼等は疑もなく正當である。卽ち彼等は自分自身の哲學を定義するのである。彼等は哲學が其の歷史過程に於いて、他の問題をも提起した事を否定はしないけれども、其の問題の解決は不可能或ひは無價値だと說明する。それ故彼等にとつては、此等問題にかゝづらふ事は、久しい間續いて來た迷妄の如くに見えるのである。いやしくも各哲學者がかかる概念決定の意味を明確に意識してゐる限り、哲學が認識論のみに限られ樣が、或は內的經驗に基づく科學に基礎を持たうが、又諸科學が其認識を實現する體系的秩序に基づかうが、其の正當なることに關しては何等の疑ひを挾む餘地がないのである。」

Der Gesichtspunkt, aus welchem die dargestellten Begriffsbestimmungen der Philosophie entworfen worden sind, war sonach der das systematischen Philosophen, welcher aus dem Zusammenhang seines Systems in einer Definition aussprechen sucht, was *ihm* als wertvolle und

lösbare Aufgabe *erscheint*. Er ist damit unzweifelhaft in seinem Recht; er definiert dann seine eigne Philosophie; er leugnet nicht, dass die Philosophie im Laufe der Geschichte sich auch andere Aufgaben gestellt hat, er erklärt aber ihre Auflösung für unmöglich oder für wertlos, und so erscheint ihm die Arbeit der Philosophie an ihnen als eine lang anhaltende Illusion. Sofern der einzelne Philosoph sich *dieses Sinnes seiner Begriffsbestimmung* klar bewusst ist, kann über seine Berechtigung kein Zweifel sein, die Philosophie auf Erkenntnistheorie einzuschränken oder *auf* die Wissenschaften, die in der inneren Erfahrung gegründet sind, oder *auf* die systematische Ordnung der Wissenschaften, in welcher sie die Erkenntnis verwirklichen. (*S.* 363.—364.)

この最後の文は全く誤解されてゐるやうに思ふ。私はこゝに先づ私の譯し方を記しておくのが適當であると考へる「個々の哲學者が彼の概念規定の此の意味を明らかに意識してゐる限りに於ては、哲學を認識論に制限し、或ひは內的經驗に基く諸科學に制限し、或ひはそれに於て諸科學が認識を實現するところの諸科學の體系的秩序に制限することの彼の正當さについては疑ひはあり得ない。」思ふに勝部氏はaufを「基礎を持たうが」「基づかうが」と譯されたのであらうが、それはeinzuschränkenに關係する前置詞であつて、制限される範圍を限定する意味をもつ。この點では私は誤まつてはゐないやうである。此の制限の三つの仕方はDie neuen unmetaphysischen Wesensbestimmungen der Philosophieの章の下に擧げられた三つの立場に對應する。しかし個々の哲學者がかく哲學を制限することの正當さは如何なる限りに於て疑

はれないか。それは、個々の哲學者が、原文の前半に述べ來られたやうな彼の概念規定の意味を明らかに意識してゐる限りに於てである。そこで勝部氏が dieses Sines seiner Begriffsbestimmung をたゞ「かゝる概念決定の意味を」と流れるやうに譯されたことが重大な禍を含んでゐるといふこと、氏がそれを「彼の概念規定の此の意味を」と讀まれたならば auf を「基礎を持つ」と譯して落着くことを意味の聯關が許さなかつたであらうといふことが想像される。吾々は次に文の初めに眼を轉じよう、sonach は「勿論」ではなく「それ故」である。次に、勝部氏は was ihm als……を「何が自分にとりて……」と譯されたが、そこは「價値多き解決し得べき問題として彼に現はれるものを」と譯すべきであると思はれる。氏の譯文によると、體系的哲學者は哲學の定義に於て、單に自己の關心が何れの問題にあるかを云ひ表はすに止まるかの如くである。けれ共原文の意味はその問題が單に自己のみならず全ての人の關心を要求するものとして彼に現はれるものを云ひ表はすといふにある。のみならず「現はれる」といふ語を殺してはならない、蓋し各々の問題が價値多き問題として各々の哲學者に現はれることには或る內面的關係が存するといふのがディルタイの歷史の見方の一をなすのであるから。

（f）　さて哲學の本質への結論は、體系的哲學者の見地を通つて歷史的見地に移る。そこでディルタイは書いてゐる、――哲學の諸問題の解決は悉く、それが歷史的に見られるならば、一つの現在とそれに於ける一つの狀態に屬する。然るに人間（此の、時の產物）といふものは、彼が時に於て働く限り、彼が創造するところのものを、或る永續的のものとして時の流れから取り出すことの中に、彼の存在の確實性を有する――この假象に於て彼

はより喜ばしげにまたより力强く創造する。さて

Hierin liegt der ewige Widerspruch zwischen den schaffenden Geistern und dem geschichtlichen Bewusstsein. Es ist *jenen natürlich*, das Vergangene vergessen zu wollen und das zukünftige Bessere nicht zu achten: *dieses aber* lebt in dem Zusammenfassen aller Zeiten, und *es* gewahrt in allem Schaffen des einzelnen die *diesem mitgegebene* Relativität und Vergänglichkeit. Dieser Widerspruch ist das eigenste *still getragene Leiden* der gegenwärtigen Philosophie. (*S.* 364.) 之に對する邦譯は

八三頁「この點に創造する者の精神と歷史的意識との間の永遠の矛盾が介在するのである。(改行) 彼等が過去を忘れんとし、將來のより良きものを無視せんとするも宜なる哉。併もこれ等は凡ゆる時代の總括の内に生きてゐる。而してかゝる『時』は、各個人の全ての創造の中に與へられたる相對性と無常性とを認めるのである。この矛盾は現在の哲學の中にも尙存在する最も固有的な禍である。」であると思はれる。

dieses aber を勝部氏は「併もこれ等は」と譯されたがそれは非常な誤譯である。jenen が den schaffenden Geistern を代表する如く dieses は das geschichtliche Bewusstsein を代表する。その故に中性の單數形になつてゐるのである。從つてまた aber の譯として「併も」よりも「けれども」の方を選ばねばならないやうに見える——思想が反對の主題に轉ずるのであるから。次に勝部氏が und es gewahrt の es を「かゝる『時』は」と譯されたのは極端なる曲解であると思ふ。之を dieses 卽ち das geschichtliche Bewusstsein の代名詞として讀むことは文法が要求するところであり、また文の内容が要求するところでもある。また die diesem mitgegebene Re-

lativist は氏のやうに單に「與へられたる相對性」としないで原文に忠實に「之と共に與へられたる相對性」と譯して戴きたい。

原文では第一文と第二文とは同一のAbsatzに屬してゐる、然るに勝部氏は行を改めてゐられる。かく第二文を新しいAbsatzで初めることには何等の理由なく、却つて有害である、(私はdieses及びesに關する誤譯を思ひ起してゐる。)jenen natürlichの譯として「彼等が……せんとするも宜なる哉」では、曖昧であつて、それでは「道理として當然である」といふ意味しか現はれて來ない。けれ共原文は明らかに「彼らにとつて自然である」と書いてゐる。それを換言すれば、過ぎ去つたものを忘れんとし、將來のより良きものに尊敬を拂はぬといふことが彼らの自然の傾向なのである。決してこのことが當然であるとか、道理であるとか——卽ち宜であるといふ意味ではない。

誤譯は之に盡きない、最後の文は全然氏によつて誤解されてゐるからして、その批評に入る前にこゝで、全體に亙つての正しい譯として私に思はれるものを記させて戴きたい。「こゝに諸々の創造的精神と歷史的意識との間の永久の矛盾が存する前者にとつては、過ぎ去つたものを忘れんと欲し將來のより良きものに尊敬を拂はぬといふことは自然である、けれども後者は全ての時代の綜合に於て生き、そして個人の全ての創造の內に、之と共に與へられたる相對性と無常性とを見てとる。此の矛盾は現代の哲學の最も固有な、默々として抱かれてゐる惱みである。」字義から云つてsitは勝部氏によつて譯された如く「も尙」ではない、またLeidenは「禍」ではない。けれども誤解はそれに盡きない、卽ちかの矛盾が、氏が譯されたやうに「現在の哲學の中にも尙存在する」のであるならばそれは現代の哲學に最も固有なものではないこと

になるであらう。勝部氏の譯はそれ自らに於て矛盾してゐると思はれる。この原文は、この矛盾が何故に現代の哲學の最も固有な惱みであるかの理由を述べる一文によつて伴はれてゐる。それはdaによつてつながれる二つのSätzeから成つてゐる。氏はこのdaを全く譯さずして二つの文に切り放してゐられるが、それはディルタイを呑んでかゝつたやり方である。

(g) 邦譯八六頁。「哲學の中に生起したすべての事は、かゝる出發點によりて、卽ち其の根本問題によりて、何等かの方法で制約せられてゐる。斯くて人間精神が世界及び人生の謎に對してとり得る凡ゆる態度の可能性は吟味されるのである。」

alles was in der Philosophie geschieht, ist *irgendwie* durch diesen Ausgangspunkt, durch ihr Grundproblem bestimmt; alle *Möglichkeiten werden durchlaufen*, wie der menschliche Geist sich zu dem Rätsel der Welt und des Lebens verhalten kann. (S. 365)

alle Möglichkeiten werden durchlaufen が「可能性は吟味されるのである」と譯されてゐるのは何故であらうか。それは字の如く「全ての可能性が歷進される」と譯さねばならないやうに思ふ。(b)に於て Möglichkeiten が無視され、(q)に於て durchlaufen が輕卒に譯されてゐることを思ひ合はせると、勝部氏は、この論文に於て重要な、この言葉を注意深く見てゐないことが想像される。可能性が吟味されると譯されたのでは、全ての可能性が歷進されることが一つの關聯としての進行であること卽ち歷史的聯關であることが充分示されない。邦譯は irgendwie を「何等かの方法で」としてゐるが「何らかの仕方で」とか「いかやうにか」と譯する方が良いと思ふ。

(h) Hier findet ein wesentlicher Zug seine

Erklärung, *der uns an den Erscheinungen der Philosophie entgegengetreten ist.* Der Name Philosophie.....(S. 366) に對する邦譯「此處に哲學の或る本質的特質の說明が存在する。哲學なる語は……」(八七頁)は der uns にはじまる一文を脫漏してゐる。「哲學の諸々の現象に卽して吾々に向つて來つたところの」ものを研究するのは、ディルタイの「哲學の本質規定」の根本的な態度である以上、之は譯されねばならないと考へる。

(i)　九九頁。「我々は今や近代に於けるかゝる人生哲學の本質を捕捉して見よう。人生哲學は、普遍妥當性と基礎付けとの方法的要求が漸次放棄し解脫せられる一面を示してゐる。生活經驗より人生を解釋せんとする方法は、かゝる狀態にありても尙益々自由なる形式を採用してゐる。」

Suchen wir das Wesen dieser modernen Lebensphilosophie zu erfassen. Es bildet die eine Seite derselben, wie hier in allmählicher Abstufung die methodischen Forderungen der Allgem ingültigkeit und Begründung *nachlassen*; das Verfahren, das aus der Lebenserfahrung eine Deutung des Lebens gewinnt, *nimmt in dieser Abstufung* immer freiere *Formen an*; (S. 370)

最後の in dieser Abstufung を「かゝる狀態にありても尙」と譯してゐられるが、それは原文の意味を全然損傷してゐる。原文は、人生哲學が普遍妥當性と基礎付けとの方法的要求が減退する段階の增長につれて、益々自由な形態をとることを意味しようとしてゐるのに、邦譯はこの併行を斷ち切つてゐる。それは「この段階に於て」或ひは「この段階につれて」と譯さねばならないと思ふ。尙ほ結尾の「採用してゐる」は annehmen の譯として此の場所では誤譯である。「益々自由なる形をと

る」と譯して戴きたい。

(j) Ihr Auge bleibt auf das Rätsel des Lebens gerichtet, aber sie verzweifeln daran, dieses vermittels einer allgemeingültigen Metaphysik, auf Grund einer Theorie des Weltzusammenhangs aufzulösen; *das Leben soll aus ihm selber geduntet werden*.....(S. 370) の最後の文は「人生は彼等のかゝる眼によつてのみ釋明さるべきである」と勝部氏によつて譯されてゐる(一〇〇頁)。けれども ihm は Leben の代名詞であつて「生命は生命そのものから解釋されねばならない」と譯すべきである。生命を生命そのものから理解することは、デイルタイの哲學に於ける „der herrschende Impuls" であり、またその用語は彼の論文に於て屢々現はれてゐる(Das Erlebnis und die Dichtung. S. 267, 330. Schriften. V. S. 4)。それは彼の生の哲學の一つの主要な特色である。

(k) この箇所は、少し離れてゞはあるが Eine Richtung der Literatur von eigner Grösse und selbstständigem Charakter *kommt in diesen Schriften zum Ausdruck*. (S. 371.) なる一文を導く。邦譯は「獨自の偉大と獨特の特質とを有する文學の一傾向は、かゝる筆によりてのみ表現せられる。」(一〇〇頁)である。それは次のやうに訂正されねばならないやうである。「特殊の偉大さと獨特の性質とをもつところの、文學の一つの傾向が之らの作品に於て現はれる」と。その意味は、例へばニイチエ、ショーペンハウアーの哲學的作品はまた同時に文學上の新しい一つの傾向を生み出したことを云ふのである。原文には「のみ」に相當する字は全然無いのみならず、それを入れて譯しては意味を誤るのである。

(l) こゝに掲げる原文は、精神生活の構造を

記述してゐる章に屬し、重要な內容をもつてゐると思ふのであるが、こゝにも亦誤譯を發見した。Das Seelenleben zeigt Gleichförmigkeiten, die an den Veränderungen in ihm festgestellt werden können. (S.372.)「精神生活は、其中に於ける諸々の變化に依りて確定され得る同形性を提示してゐる。」(一〇五頁)。同形性は諸々の變化に卽して——それらと共に存するものとして確定され得るのであつて、變化に依りて確定され得るのではない。anは注意深く「卽して」と譯されることを望む。

(m)　一〇五—一〇六頁「科學は總括されたる體驗の中から個々の過程を類別し、其の過程に於ける合法性を歸納的に推論する事によつて、此の同形性を確定する。」

Die Wissenschaft stellt sie fest, indem sie aus den *zusammengesetzten* Erlebnissen einzelne Prozesse aussondert und Regelmässigkeiten an denselben induktiv erschliesst. (S. 372)

zusammengesetzte Erlebnisse を「總括されたる體驗」と譯されたのは良くない。體驗は總括といふ加工をまつことなく一の聯關である。科學が此の聯關の中から個々の過程を分離する。卽ち體驗はこの分離といふ Operation の前の綜合體である。でそれは構造的なる體驗の意味に於て「複合的(或ひは組成的)なる體驗」とすべきである。この語はこの原文が屬するAbsatz の終りに再び現はれる。Jedes Erlebnis, als *einen Moment* unseres Daseins erfüllend, ist *zusammengesetzt*. (S. 373). 勝部氏は「斯くて我々の存在の要素をなす、すべての體驗は總括される。」(一〇七頁)と譯して居られる。それでは Strukturzusammenhang たる體驗の性質がすり拔けてしまふ。(また Moment は男性として用いられてゐるから「要素」ではなく「瞬間」である。)私がこのやうに拘泥するのを許して戴きたい

――勝部氏は二〇三頁に於て、……die Erlebnisse wie sie *sich* in der inneren Erfahrung *abbilden*, (S. 406) を「我々の内的經驗に於て形成される所の體驗は」と譯してゐられる。邦譯を讀むものは、體驗が「總括され」また「形成される」ものであると考へることを餘儀なくされるであらう。

（n）溯つて（m）に掲げた原文を直接隨へる所の Das ist menschliches Leben. Und *in seinem Zusammenhang* sind Wahrnehmung, Erinnerung, Denkprozess, Trieb, Gefühl, Begehren, Willenshandlung auf die mannigfaltigste Weise *verwebt*. も「此れが卽ち生活である。知覺、想起、思惟……は斯かる關係の中に於て、極めて多樣なる形式を採つて相互に織り合はされるのである。」（一〇七頁）と譯さないで、次の樣に譯して戴きたい、卽ち「之が人間の生命である。そして人間の生命の聯關に於ては、知覺、記憶、思惟……は實に多樣な仕方に於て織り合はされてゐる。」「織り合はされてゐる」とは、決して一つの Operation の謂ひではない、しかし「織り合はされるのである」と云ふのは一つの加工を表はすに他ならない。verwebt は zusammengesetzt と同じ意味である。次に in seinem Zusammenhang が「人間の生命の聯關に於て」であることは明らかであり、邦譯の「かゝる關係の中に於て」は人を誤らせるものではないかと思ふ。

（o）一二〇頁「吾々の眼、及び意向を特殊物時處により決定せられた物に限定する事は、我々の本質の全體、並に我々の個有價値の意識を、亦因果關係並びに時所の制約からの吾々の獨立を、滅却することになるのである。卽ち然る時には、かゝる制限より人間を救ふ宗敎、詩歌、哲學の世界は、最早再び開かれないことになるであらう。」

Die *Einstellung* des Willkos und der Inten-

tion in das Gesonderte, nach Ort und Zeit Bestimmte *würde* die Ganzheit unseres Wesens, das Bewusstsein unseres Eigenwertes, unserer Unabhängigkeit von der Verkettung nach Ursachen und Wirkungen, von der Bindung an Ort und Zeit auflösen: *würde* dem Menschen nicht immer wieder das Reich der Religion, Poesie und Philosophie offen, in dem er von solcher Beschränktheit sich erlöst findet. (S. 377.)

原文の前段がもつ würde は Konjunktiv であるから、氏のやうに「なるのである」としては不可であると思ふ。(私がこのやうに文法に拘泥することは次第に諒解を得ることゝ信ずる。) 次に後半の *würde* dem Menschen…… は假定を示してゐるのであつて、氏のやうに「卽ち然る時には……なるであらう」と譯したのでは全然意味が違つて來る。次に勝部氏は「吾々の獨立を、滅却することになるのである」と譯されたが、原文の unserer Unabhängigkeit は das Bewusstsein に關係してゐるのであるから「吾々の獨立に就いての意識を滅却するであらう」と譯さねばならない。私は全文を次の如く譯せば良いかと思ふ。「特殊のもの、所と時とによつて限定されたものに眼ざしと志向とを注ぐことは、吾々の存在の全體、吾々の固有の價値、原因結果の連鎖及び所と時とへの羈束からの獨立——之らのものについての意識を解消せしめるであらう。——若し人間に宗教、詩及び哲學の王國が、それに於て彼がかやうな制限された狀態から解放されてゐる自分を見出すところのこの王國が、常に再びひらけないのであるならば。」

(P) 一二〇頁。「彼が此の際、それに於いて生活する直觀は、常に如何樣にかして、現實、價値

及び理想、目的並に規則の關係を改めなければならない。」

Die *Anschauungen*, in denen er hier lebt, müssen immer irgendwie die Beziehungen von Wirklichkeit, Wert und Ziel, Zweck und Regel *umspannen*. (S. 377.)

勝部氏は umspannen müssen を「改めなければならない」と譯されたが、それは全文の意味を破壞する。それは「包み込む」又は「包括する」と譯さねばならぬこと明白である。また Anchauungen はこゝでは Welt- und Lebensanschauung の謂ひに於ける Anschauungen であり、(Synonym は Ansicht) 「觀察」とか「見解」とかの譯し方を選ぶべきである。

(q) 哲學的世界觀の諸類型を叙述する章である。一九二頁。「而して其の發展と發展の中に現はれる變化に對して、吾々によつて表はされた過程、即ち其の内に於て現實に對する關係が一定の地位を占める過程が實現せられるのである。……併し乍ら類型の發達と其の特質とは、價値、目的並びに意志の結合の關係を基礎として、理想概念が發達したる過程によつて制限を受くるものである。」

Und auf diese Entwicklung und die in ihr auftretenden Modifikationen *wirkt zunächst* der von uns dargestellte Verlauf, in welchem das Verhältnis zur Wirklichkeit bestimmte Positionen *durchmacht*; ..... *Dann aber* ist die Entwicklung und *nähere Nuancierung* der Typen durch den Verlauf bedingt, in welchem auf Grund der Beziehung von Werten, Zwecken und *Bindungen des Willens* die Idealbegriffe sich in der Menschheit entfaltet haben. (S. 403)

原文は哲學的世界觀の諸類型と、その生成發展

の法則的關係を叙述してゐる。その發展に第一に、實在に對する關係が諸々の一定の立場を歴進する經過が作用し、次には、理想概念が人類に於て自らを發展する經過によつて、その發展が制約されてゐる――之が前掲の原文の大意である。然るに譯文は Zunächst……Dann aber に無關心であり、auf……wirken を「對して實現せられるのである」としたために、世界觀の構造の Variabilität と、その類型の Mannigfaltigkeit を規定する法則的關係についての問題へ、デイルタイと共に近づくこと(S. 381)を困難にしてゐると思ふがそれは私の誤解であらうか。durchmachen は單に「占める」でなくて「歴進する」であり、Bindungen des Willens は「意志の結合」では意味をなさず、當爲としての「意志の拘束」である。nähere Nuancierung は「その特質」と譯することを理由づける何ものをもたない、それは第一文に云ふ Modifikationen と同意義の用法である。そこで私の言ひ分をまとめれば次のやうである。「そして此の發展と之に於て現はれる變形とに對して、先づ、吾々によつて叙述されたところの、それに於て實在に對する關係が諸々の一定の位置を歴進する經過が作用する。……次にはしかし諸々の類型の發展と細かい色合ひとは、それに於て諸々の理想概念が價値、目的及び意志の拘束の諸々の關係に基いて人類に於て自らを發展し來つた經過によつて制約される。」

（r）　前掲の章は(S. 402 ff.)實證主義、客觀的理想主義、自由理想主義の叙述の後、S. 404 に到つて Jede dieser Weltanschauungen……なる Absatz を以つて終つてゐる。この Absatz が哲學的世界觀の諸類型について述べるのであることは明白である。然るに邦譯は、之を新しい Absatz を以つて始めることなく、「自由觀念論」の叙述の中に一括してゐる。それ故原文では Jede dieser Weltansch-

uungen が「哲學的世界觀の諸類型の各々」を意味することは明らかであるが、邦譯を讀むとそれは恰も自由觀念論の各々の變形を意味するかの如く見える。また Darin, dass sie der Persönlichkeit in ihren verschiedenen Leistungen innere Einheit geben, beruht *ihre Macht.* は「この世界觀の立場の長所は、種々なる行爲に附き人格に對して一つの內的統一を與へる點に存する。」と譯されてゐるがそれは益々私の疑惑を强める。この邦譯は全く自由觀念論の長所が之々であると語つてゐるのである。しかし ihre Macht は「各々の哲學的世界觀の力」を意味する。邦譯の「立場」は餘計であり、それが恰も自由觀念論についての叙述であるかの如く思はしめることに與つてゐるのである。Macht は「長所」では强すぎる。邦譯は ihre の譯に於て不足し Macht の譯に於て過ぎてゐる。右の原文に直接する Und jede von ihnen hat darin Anziehungskraft und Möglichkeit folgerichtiger Entwicklung, dass sie das vieldeutige Leben *von einer unserer Verhaltungsweisen aus* nach dem *in dieser* enthaltenen Gesetze gedankenmässig erfasst. は勝部氏によつて「而して此等の世界觀はすべて自らの中に存在する法則に從ひ多義なる人生を夫々の態容により思想的に理解すると云ふ點に於て、何れも其の魅力と合法的發展の可能性とを有するのである」と譯されてゐる。邦譯によれば in dieser は「自らの中に」卽ち「此等の世界觀の中に」である。けれ共 diese は eine von unserer Verhaltungsweisen の代名詞である。邦譯はまたこれの解釋に於ても間違つてゐる。邦譯の「夫々の態容により」は「多義なる人生の態容により」としか讀めない。けれどもそれは「吾々の諸々の態度の取り方の或一つからして」と訂正されねばならない。邦譯は、それ自身としては意味が通つてゐるけれども、原文

の意味とは違つてゐる、――それは眼立たないだけに人が困らせられる誤譯である。

最後の章 Philosophie und Wissenschaft（邦譯では二〇三頁以下）は、次の見方に從へば特に重要な章である。卽ち、デイルタイに於ける哲學の概念規定は、哲學を世界觀として見ることにのみ成り立つてゐるのではない、――彼は世界觀が求められず認められない所にもなほ存する哲學の作用があると云つてゐる。この章は世界觀の構成から離れた哲學の作用を叙述してゐるのであつて世界觀に關する叙述に比して實に僅かの頁數しか費されてゐないにも拘らず――或ひは寧ろまさに此の故に、特に注意深き顧慮を必要とするのである。然るに邦譯は此の章に到つて甚だしい誤譯を頻繁に犯してゐる、註も甚だもの惜しみされてゐる、概して譯者のだれ氣味が覗はれる。私はこゝにその中の一つを選んで御敎示を乞ふに止める。

（s）二〇八頁「從つて哲學を一面的に定義する場合に於いても此こそは理論中の理論であると云ひ得るもの、又現實認識を目的とする各特殊科學を基礎附け總括するものであると云ひ得るものはないのである。」

und so gibt es auch unter den einseitigen Begriffsbestimmungen der Philosophie keine, die so *einleuchtend* wäre, als dass sie *die Theorie der Theorien*, die Begründung und die Zusammenfassung der Einzelwissenschaften *zur* Erkenntnis der Wirklichkeit sei. (S. 408.)

勝部氏は die Theorie der Theorien を「此こそは理論中の理論である」と譯してゐられるが、之こそは誤譯中の誤譯である。また ein'euchtend は「云ひ得るもの」でないこと明白である。zur Erkenntnis der Wirklichkeit を「現實認識を目的とする」と讀むのはどうかと考へる。思ふに zu は Zusa-

nmenfassung に關係する前置詞である。特殊科學は實在の部分々々を抽象する認識であつて――それは Einleitung in die Geisteswissenschaften 以來のディルタイの考へである――Theorie der Theorien としての哲學によつて初めて總括的な實在の認識が達せられるのである。私は次のやうに譯せばいゝかと思ふのである。「從つて哲學についての一面的な概念規定のうちでも哲學は理論の理論であり諸々の特殊科學の、實在の認識への總括でありまた基礎付けであるといふ概念規定ほど明瞭な概念規定は他にない。」

私がこゝに擧げた邦譯中の誤譯は、論文の主要な箇所に就いてなされたものとして考へられるものであるか、そうでない場合には他の多くの誤譯を代表するものであつて、決して之らが誤譯の全部ではない。然しまた私が提出した質疑にも、原文及び邦譯の私の側の誤解に基いてゐるところの多くのものがあるかも知れない。これについても亦教へを受けることが出來れば私の喜びであるディルタイが吾々の師である限り、勝部氏は吾々の師であるべきだからして、氏の御指導をこゝに懇望する次第である。（終り）

彙報

印度宗教學界例會

五月十二日(水)午後六時半より學生集會所南室にて

起信論の支那選述について　松本文三郎博士

美學會

五月十五日(土)午後六時より學生集會所南室にて

美的感情移入の本質　島　芳夫君

天龍岩窟について　與村伊九良君

教育學研究會